

文学作品における他者とその記述の可能性

文学作品という領域による事象の反復の現実化に注目して

秋葉亮

1. はじめに

文学作品は、自分ではない者と出会うことができる領域の 1 つである。実在、非実在を問わずに、日々の生活にいない者が現れる文学作品は、それまで決して出会う¹ことがなかった者と結びつくことを可能にする。そうした者たちが待ち受ける領域に足を踏み入れる驚きと興奮とは、古くは、ごく一部の人々が日常的に味わっていた。しかし、活版印刷技術の確立は、この領域を『他者』と『社会』を理解するツール²（大塚 2020: 5）として広く開放した。そのため、現代では、文学作品という領域は、一般生活の一部となっている。

社会学においても、文学作品内に登場する人物を、他者として参照することは、特に疑いもなく行われている。たとえば、マックス・ヴェーバーは、自伝を参考にして、ベンジャミン・フランクリンの過去を語っている。また、アルフレッド・シュッツは、物語の登場人物であるドン・キホーテを例に、多元的現実を説明している。文学作品を参照としたこうした例示は、読者の理解を円滑なものとする技法の 1 つとして、社会学に限らず人文学においては一般的なものであるといえよう。

以上のような参照にもかかわらず、社会学者たちが、文学作品における他者を、理解・記述する対象に含めることはほとんどない。その理由の 1 つとして、文学作品という領域が、社会学ではなく文学にゆだねられていることがある。

しかし、文学作品における他者を、その領域に還元することなく理解することは、文学ではなく社会学の領分である。それは、文学が、その他者が文学作品という領域にあることを、常に理解の前提とするのに対し、社会学は、他者そのものを対象とするからである。このことに気付いていた社会学者として、ゲオルグ・ジンメルを挙げることができる。

ジンメルは、「いかなる意味でも文学者ではなく」という随筆において、他者の現前の瞬間性を拡張し、形象化することで、文学作品が成り立つと述べる。すなわち、文学作品とは、他者がある情景に出会ったその瞬間を、常に、ある一定の形象で参照できるようにするモノである。しかし、「現実には私にとってあまりにも強すぎ」（Simmel 1900=1999: 70）たと述べるジンメルは、「瞬間を超え出て、その縛れ^{もつ}を、ひとつの平らな形象に置き換えることがで

¹ 本稿では、「出会う」という言葉を、自己と他者とが相互的に現前するという意味で使用する。この相互的な現前は、自己と他者とのあらゆる相互作用の基盤である。ゆえに、互いに現前する（「出会う」）ことは、自己と他者との関係を、そのように規定する最初の相互作用である。また、後に述べるように、「他者」という言葉によって、人間・非人間にかかわらず、自己に差異を導入する者を指示する。よって、「相互的な現前」も、人間的な身体性の現前に限定されることはない。

きなかった」(Simmel 1900=1999: 70). すなわち、形象に還元することができない他者の現実性が、ジンメルをして、文学を成立せしめなかったのである。

しかし、ここで興味深いのは、ジンメルは、彼に向けて語られた物語の中で、その他者と出会っているという点である。ジンメルにとって、その他者は、物理的な意味で、目の前に現前していたわけではない。その他者は、音や身振りといった形象が繰り返してきた事象の中に、いた。それにもかかわらず、ジンメルにとって、出会ったのは現実の他者なのである。

ジンメルは、自らが、現実の他者に置き換えることができないと否定した形式において、現実の他者に出会う。このことは、決して1つの矛盾を指し示しているわけではない。ジンメルは、随筆の最後に、はっきりとこう述べている。「私は文学者ではない、いかなる意味でも文学者ではない」(Simmel 1900=1999: 70)。引用文における執拗な繰り返しは、その瞬間を形象化する可能性を否定しているだけではない。その瞬間を、既に形象化されているモノとして捉えることも、まさに「いかなる意味でも」、文学的形象を否定している²。

つまり、ジンメルは、自らが投じられた瞬間を形象化しないだけではない。その瞬間をすでに形象化されたものとして、理解することもしない。そして、後者の否定を経ることで、文学作品という領域への社会学的関心が成立する。その領域には、形象へと完全に還元されることのない、生き生きとした他者がいることが明らかになるからである。文学作品という領域におけるこの他者は、すでに／まだ、形象化を前提とする「文学者」の領分にはいない。すなわち、その他者は、文学の対象とはなりえない。代わりに、領域ではなく瞬間へと眼差しを向ける社会学が、その他者を対象とし、理解・記述することができるのである。

とはいえ、瞬間にいる他者を対象とする理解・記述は、容易ではない。ゆえに、社会学は、「人間」という持続的な対象を前提として、様々な理論や科学的技法を発展させてきた。

しかし、その前提は、文学作品における他者を、そもそも研究の対象に含めない。よって、社会学は、一方で、文学作品における他者があることを自明とし、その他者を参照することを是としながら、他方で、その他者の他者性については、研究の対象から排除することで理解・記述してこなかった。逆にいえば、文学作品における他者を研究の対象に含めることは、社会学における他者概念を問い直すことにつながっている。つまり、他者とは何者かという、社会学の根本的な問いかけが、瞬間的な他者を対象とすることで、再び掲げられるのである。

また、文学作品における他者を研究の対象とすることは、日常生活世界における他者の理解・記述にもつながっている。確かに、文学作品という領域における他者は、日常生活世界における他者に比べて、あまりにも瞬間的である。しかし、その瞬間的な他者との出会いは、時に、日常生活世界における他者にとって、重大な意味を持つ経験となる。ゆえに、文学作品における他者を、間接的にでも、研究の範囲に含めることで、日常生活世界における他者についても、より深く理解し、より豊かな記述を行うことが可能になるであろう。

以上の学問的意義と、筆者が持つ文学作品という領域への社会学的関心に従って、本稿は、文学作品という領域を例に、瞬間的な他者を記述する可能性の提示を試みている。

² そして、ジンメルは、この形象化された他者と瞬間における他者との同一性の否定を、相互作用の基本形式にまで拡大する。ジンメルが、「人間が他者について個人的な接触から得た形像は、あるずれによって条件づけられている」(Simmel 1908=[1994] 2016: 43) と述べる時、その「ずれ」は、他者の他者性が決して形象化されえないことを、直接的に示している。

2. 研究の領域と問いの設定

文学作品という領域における他者の記述は、他者概念の再構成を要請する。既に述べたように、社会学の伝統において、他者は、空間的・時間的・身体的に同一性をもつ「人間」に、その所在を与えられてきた。その所在の理論的正当性は、ルネ・デカルトを1つの契機とする近代哲学の伝統や、社会学の誕生と同時期に発展した自然科学との関連の上で確保されている。また、その実践的な正当性は、理解の対象である行為や行為の総体を、個人や個人という単位に基づいて、観察可能な形にできることに求められる。この二重の正当性に基づいて、「私が他の人を直接的に経験するのは、その人が、生活世界的空間と世界時間のある局面を私と共有している場合に限られている」（Schütz and Luckman 2003=2015: 148）と述べることは適切である。「人間」の定義からして、他人という形での他者の現前は、私という「人間」と空間・時間・身体を共有することでのみ可能となるからである。

この「人間」という形式を、理解すべき他者とする社会学は、その形式を非人間的領域に拡大して、その領域を理解する。日常生活世界における伝言や手紙、学問領域における調査票や統計データは、非人間であるそれらのモノが「人間」という他者を指示するからこそ、社会学の対象となる。逆に言えば、あらゆる他者性が、直接的・間接的を問わず、他人の現前によって理解し、記述されるためには、「人間」と非人間とが区分され、前者を中心として後者が配置されることが、前提とされなければならない。このことは、シュッツが設定した「他者の間接的経験」という極が、その反対の極である、他人という形式での「他者の直接的経験」に従属的であらねばならないことを説明する。

本稿では、他者という概念についての理論的な論述を行うことはできない。しかし、文学作品という領域を対象とする本稿は、「人間」に従属しないモノ、そして、他人ではない他者の一例を提示することになる。

まず、文学作品は、「人間」で満ちているわけではない。そこには、紙や文字、ストーリーラインや文法といった非人間的な要素が満ちている。そして、そうした要素は、生き生きと文学作品というモノを形作っている。ゆえに、文学作品という「モノ」に、自分自身の記述を生み出させ」（Latour 2005=2019: 150）るのであれば、作者のような「人間」という他者が、そうした要素たちの相互作用をつかさどっているわけではないことが明らかになる。そして、文学作品における他者も、常に「人間」という形式を取るわけではない。太陽、風、動物、植物、神から仏に至るまで、文学作品における事象は多様である。このように、擬人化された登場人物に限ってみても、そうした事象が、「人間」ではないことは明らかである。

文学作品という領域が帯びている、以上の非人間性は、文学作品において、「人間」という他者を間接的に経験できることを否定するわけではない。しかし、非人間性を帯びている領域において、「人間」という他者を間接的に経験できるということ自体、他者が人間—非人間の区分を超越していることを暗示している。

このように、文学作品という領域は、人間—非人間の区分を超えた他者を暗示している。けれども、今のところ、その領域にいる他者は、既存の「人間」という他者現前の形式との対立における、否定的な規定においてしか示されてはいない。これは、「人間」という他者概念では、文学作品における他者を肯定的に記述できないことに起因している。「人間」という他者を理解・記述するための形式は、文学作品における他者それ自体を記述しえない。つまり、後者について記述する際に、前者の形式を採用することはできない。それは、前者

の形式においては、文学作品における他者が理解・記述の対象とならないことが、端的に示している。そのため、文学作品における他者の記述においては、「人間」という他者現前の形式に基づかない、記述のあり方も提示しなければならない。

以上のことから、本稿における他者は、「人間」という意味に限定されない。さしあたって、本稿では、他者という言葉で、自己に差異をもたらす何者か、という意味で使うことにする。この際、差異は、自己と他者との間に生じるのであるから、自己もまた、他者に差異をもたらしている。また、自己を取り巻くあらゆる事象が、他者として認識されるわけではないことも、この定義から明らかになる。自己にとって、差異をもたらすことのない、既に知っている事象は、他者として認識されることはない。一方で、自己が向かい合う事象は、その事象が既存のものでないのなら、自己にとっての他者となる可能性を秘めている。

このように概念を整理することで、文学作品という領域における他者を、社会学の記述対象とする上で、必要な過程が明らかになる。

最初に、文学作品という領域において、他者がありうるのかを検討しなければならない。そのためには、文学作品という領域において、どのようにして、事象と読者とが向かい合うのかを理解する必要がある。その過程において、まず、文学作品という領域と事象との関わりが分析の対象となる。ヴァルター・ベンヤミンにならえば、その関わりは、事象と読者の個別の関係に先行するからである。次に、文学作品という領域が、事象と読者との関係に対して、どのような作用を持っているのかを分析する。その際、事象と読者との関係が、文学作品によって規定されていないかを検討するため、意味という基準が導入される。そこでは、事象の意味と文学作品の意味、それぞれの固有性が、以上の分析の結果として、文学作品という領域における事象が既存のものに規定されず、独自のものとして読者に向かい合うことが確かめられる。つまり、文学作品における事象は、それと向かい合う読者にとって、他者となりうるということが明らかになる。

その上で、文学作品における他者を記述するための課題と、具体的な方法の検討に移ることになる。この段階では、まず、作者や読者、登場人物といった既存の他者を、文学作品における他者に投影するという記述方法を検討する。その検討においては、その方法が抱える問題を明らかにするとともに、文学作品における他者を記述する上での課題も提示される。そして、その課題を解決するために、文学作品における他者がある相互作用を対象とする記述方法を導入し、その方法が適切であるかが精査される。

以上に述べた研究の過程は、本稿で行われる研究の限界を決定する。本稿は、文学作品に対する新しい読解の方法や、ある具体的な文学作品についての新しい理解を示すわけではない。それらは、本稿の対象にはならない。先に述べた問いは、文学作品を読む者たちの外側に設定され、結果として、筆者を含むその者たちに新たな経験をもたらす問いではない。本稿の探究は、読者による日常的実践としての文学作品への関わりから、超越することはない。むしろ、本稿は、文学作品に関わるその瞬間で、読者によって自明的に理解されている他者を、その自明性を剥奪することなく対象とする。文学作品における他者は、読者にとって、自明的に現前するからである。

3. 文学作品という領域と事象

(1) 文学作品という領域の統一性

ベンヤミンは、文学作品について、「事象内実と真理内実は、作品が成立した頃には一体化していたのが、作品の持続とともに分離してゆくのだ」（Benjamin 1921-2=1995: 42）と述べている。このことは、事象と真理とに対する、文学作品の関わり方の違いを表している。文学作品は、事象を反復的に³繰り返す。一方で、真理は、そのようにして繰り返されたあらゆる瞬間に生起するため、文学作品が直接的に関与することはない。この、文学作品による関与の差が、事象と真理との分離を決定づけている。

文学作品が関与することで生じる分離にもかかわらず、文学作品における事象の反復は、真理が生起する瞬間の前提である。このことは、読者が事象と向かい合う瞬間が、文学作品における事象の反復によって、可能となっていることを意味している。つまり、その瞬間における事象と読者との関係を理解するためには、まず、文学作品という領域において、どのように事象が反復するのかを理解することが必要となる。

文学作品が描き出す事象は、同一性を持って文学作品に定置される。つまり、文学作品における事象は、文学作品によって、その文学作品が読まれるあらゆる瞬間を超えて同一化される。言い換えれば、文学作品において、事象はイマココを失い「平らな形象」に置き換えられることで、イマココを超え出た反復へと投じられる。この、事象が反復する可能性を必然化すること、セーレン・キルケゴールに従えば現実化することが、文学作品が持つ事象に対する作用である。

文学作品において、事象に同一性をもたらすのは、書かれた文字、テクスチャーを持った紙、最近では電子空間でのアクセス権などの要素である。ここに、ベンヤミンが、自らの芸術論の中でその影響を追求し、テオドール・アドルノが資本主義との関係で批判的に取り上げた「技術」が、そうした要素を統合する概念として、現れてくる。具体的には、文字の継続性や印刷の精度、翻訳の正確性などの、文学に関わる様々な技術的規則の総体は、1つになった文学作品を構成する⁴。たとえば、昨日と今日読んでいる本は、以上の技術的諸規則によって、同一のモノである。こうして規定された文学作品の同一性は、それぞれの瞬間で描き出された事象を結びつける基準として作用する。つまり、事象の反復は、文学作品という領域における技術的諸規則に基づいて、現実化される。

事象の反復の現実化は、1つの実存的な文学作品の内部においてのみ、見出せるわけではない。すなわち、紙の連なりによる1つの物質的な書籍、紙の凹凸に残り続けるインクやひとまとまりの持続的な電子データといった物理的要素のみが、文学作品という領域において、事象が反復することを可能にしているわけではない。あらすじや情景の設定の共有によって、事象の反復が複数の文学作品にまたがっていることは、文学評論のフィールドにおいては自明的なものである。たとえば、大塚英志は「小説、文学、物語とは『形式』そのものの名前です」（大塚 2020: 20）と『文学国語入門』（傍点は筆者による）で述べている。大塚にとって、「文学」とは、事象が、複数の文学作品の間で反復する、具体的な形式の1つである⁵。つまり、文学作品という領域には、個々の作品が「文学」作品として作成されるこ

³ 「反復」の概念については、『差異と反復』（Deleuze 1968=2007: 20-86）を参考。文学作品は、ジル・ドゥルーズの言う「反復を、極限的な類似ないしは完全な等価として『表象-再現前化』すること」（Deleuze 1968=2007: 22）に関わりつつも、事象が現実反復することも可能にしている。

⁴ 文学作品という領域に固有の技術的要素は、文学作品と他の芸術領域との違いを決定する。

⁵ その形式は、大塚（2020）によれば、『吾輩は猫である』と『女生徒』、『転生したらスライ

とを可能にする、集合的な形式が備わっている。

文学作品という領域の探究の矛先は、作品群を横断する集合的かつ具体的な形式の設定ではなく、その設定を可能にする、諸規則の結びつきによる作用に向けられる。その作用とは、具体的形式の形成を可能にする諸規則が、その紡ぎ合いによって果たす機能である。そして、その機能は、「諸対象の一つの集合を説明することのできるような一つの統一性」(Foucault 1969=2012: 93)を規定する。

文学作品という領域は、事象の反復を現実化するという機能を持つ。そして、その機能を可能にする諸規則は、領域の統一性⁶を規定する。ゆえに、文学作品という領域は、技術的諸規則や集合的な形式の共有によって、説明される。しかし、そうした諸規則は、文学作品という個々の実践において初めて、結びつき、機能する。要は、文学作品という領域の統一性は、諸規則が結びつく実践を可能にすると同時に、その実践によって規定される。つまり、文学作品という領域は、個々の実践に対して、先立つわけではない。むしろ、個々の実践を、事象の反復を現実化するという機能で結ぶ1つの統一性が、文学作品という領域である。

(2) 文学作品の意味と事象の意味

文学作品という領域の統一性は、反復が現実化した各瞬間の事象に、同一性を付与する。しかし、その統一性が、個々の実践に先立たない以上、その同一性も、各瞬間に先立って、事象に付与されるわけではない。一方で、反復が現実化した各瞬間における事象間の差異は、いまだに曖昧なままである。もしも、文学作品における事象が、常に、同一の意味を生み出すなら、事象は、文学作品に従属していることになるだろう。ゆえに、意味という水準においても、文学作品とそこで反復する事象とを精査する必要がある。

文学作品で反復する事象は、文学作品が読まれ、注釈がつき、批評されるといった、その事象にとっての他者、すなわち読者、との関わりにおいて、その意味を生起する。すなわち、内容の面白さや、社会的意義といった事象の意味は、読者との関係において生起する。これは、読者が事象に対して、評価者であるということを意味しない。それは、読者が、事象と向かい合う瞬間において、特権的地位を占めることができないからである。むしろ、反復する事象と向かい合う瞬間において、読者は他者として差異を持ち込む。この差異が、読者が事象に対して持つ意味と、事象が読者に対して持つ意味を生起することを可能にする。つまり、文学作品で反復する事象の意味とは、事象に差異を持ち込む他者との関係において、生み出され、現前し、理解される。

けれども、文学作品は、それが反復する事象に対して、差異をもたらすような存在ではありえない。すでに述べたように、文学作品こそが、事象の反復を現実化しているからである。ゆえに、反復する事象に差異が導入されるのかという観点からすると、反復する事象と文学作品とは同じ意味を持つ、と理解することは適切である。両者にとっての共通の他者である読者との関係においては、両者の意味は、同一性をもって、生起するからである。

しかし、事象の反復を現実化するという、事象に対する文学作品の関わりに注目すると、

ムだった件』のそれぞれの作品において繰り返されているものだという。

⁶ 本稿では、文学作品という領域を、それ自体が持つ規定によって記述した。一方で、他の領域との比較によって、この領域を外的に規定するのであれば、その独自性がどのようなものであるのかが明らかになるだろう。

文学作品という領域に共通する意味が明らかになる。また、その観点からは、個々の文学作品が、そこで反復する事象に対して持つ、固有の意味も浮かび上がってくる。

文学作品という領域の意味は、自らが反復する事象に対する一種の根源的な関わりにある。その関わりは、事象の反復を現実化するという作用に基づいている。そして、その作用は、瞬間的な事象を、他の瞬間へと反復し、他者との関わりに開いている。そのため、その関わりは、反復する事象に他者が関与するための基盤でもある。つまり、文学作品は、そこで反復する事象に、他者が関与する可能性を保証している。この可能性の保証こそ、文学作品という領域が持つ第一の意味として、理解される。

そして、個々の文学作品は、その関わりの1つの実践、すなわち、その関わりの現実化に、その固有の意味を持つ。これは、事象の反復の現実化にまつわる諸規則に則って、それぞれの作品に様々な差異を見出すことが可能であるということでもある。技術的諸規則に関する考察が、ここで再び取り上げられる。記号や印刷機械などの表象に関する様々な技術や、書き込みや損傷、紅茶のシミは、個々の文学作品に固有の形を与える。そして、その固有の形において事象の反復が現実化していることは、その文学作品が持つ固有の意味として、他の文学作品との間の差異を明確に提示している。

事象の意味と、文学作品の意味とはどのように区別されるのだろうか。反復する事象と読者とは、文学作品と事象との関わりをなぞることで向かい合う。そして、事象の意味は、その関係において導入された差異によって生起する。ゆえに、事象に対して、そうした差異を持ち込むことがない文学作品は、事象の意味に関与することはできない。一方で、事象と読者との関係も、文学作品と事象との関わりを変容させるには至らない。事象と読者との関係は、文学作品が事象の反復を現実化するという作用に基づく以上、その作用自体には関与しないからである。そして、事象の意味が生起する基盤である文学作品と事象との関わりは、個々の文学作品において、様々に現実化される。そうした現実化のありようは、個々の文学作品の意味を形成するが、そうした固有の意味は、文学作品という領域へと還元されることはない。個々の文学作品が持つ、いわば歴史性は、瞬間における実践に生まれるからである。

（3）小結

これまで、文学作品という領域は、そこで向かい合う読者と事象との関係に対して、どのような作用を持つのかを探究してきた。以下では、そのまとめを行い、文学作品という領域における事象が、既存のものにも規定されない独自性を持って読者と向かい合っていること、ゆえに、読者にとって他者となりうることを示す。

まず、文学作品という領域が、事象の反復の現実化を可能にする諸規則によって統一性を持っていることが明らかになった。技術的、集合的な諸規則は、個々の文学作品を横断する形で、事象の反復の現実化を統一する。個々の文学作品は、その諸規則の結びつき、1つの実践である。その実践とは、事象をその瞬間から連れ出し、1つの可能な形で、他の瞬間に対応させることである。そのため、この文学作品という実践によって、事象は、ある瞬間における読者との関係に留めおかれないで、他の瞬間における他の読者との関係へと開かれる。つまり、文学作品は、諸規則が提供する同一性の基準でもって、事象の反復を、比較可能な形に「表象=再現前化」（Deleuze 1968=2007）する。この、事象が現実反復するという。そこに、文学作品と事象との関わりが、独自の関わりとしてある。

そうした関わりに基づいて、意味という観点から、文学作品と事象との差異が見出される。

事象の意味は、読者と出会う瞬間において、読者が持ち込んだ差異によって生起する。すなわち、事象は読者との関係において、その関係を可能にした諸規則に還元されない、自らの意味を生起する。ゆえに、事象の意味は、読者と出会う瞬間に固有のものである。

一方で、文学作品という領域は、事象が読者と出会うことを可能にすると同時に、他の瞬間へと事象を超出することに、自らの意味を生起する。結果として、文学作品という領域は、事象の意味が相対化し、複数化することを可能にする。そして、文学作品の意味の固有性は、事象の反復を現実化するそのあり方に、諸規則の実践に現れる。つまり、個々の文学作品の意味は、事象をこのように反復しているという実践にある。そして、その実践の内実は、文学作品という領域を横断するあらゆる諸規則の結びつきにおいて、定まっている。

こうして規定される個々の文学作品における意味は、容易に、他の文学作品の意味と同一化される。それは、事象の意味、文学の形式、技術的な限界といった諸規則が、個々の文学作品が持つ意味の固有性を一般化する基準となるからである。しかし、他の文学作品との同一化が行われる以前の、実践の瞬間に、個々の文学作品の意味は生起している。ゆえに、個々の文学作品の意味は、他の文学作品と共有する諸規則に完全に還元されることはない。

以上の結論は、ある読者が、文学作品という領域において事象と向かい合う瞬間は、二重の意味で、既存の何ものかに規定されないことを示している。まず、読者が事象と向かい合う瞬間は、個々の文学作品によって保証される。しかし、読者との関係における事象の意味は、読者がもたらす差異によって生起し、文学作品による保証はその意味に関与しない。次に、個々の文学作品による、事象と読者との関係の保証は、諸規則の中で可能となるが、そうした諸規則によって規定されてはいない。つまり、読者が、文学作品において出会う、自らと異なる事象は、既存のなにものにも規定されることはない。ゆえに、文学作品における事象は、向かい合う読者にとって、他者となる可能性を秘めている。

4. 文学作品における他者とその記述可能性

(1) 文学作品における他者に関する否定的な規定

ここにおいて、本稿の探究は、文学作品において反復する事象にありうる他者へと、その焦点を合わせることができる。

文学作品における他者とは、文学作品なしで、反復しない事象において出会う、そのような他者ではない。文学作品における他者には、常に、文学作品におけるという但し書きがついている。それは、文学作品の外側には、その他者がありうる場がないことを意味している。

しかし、その他者は、文学作品が事象にもたらした同一性によって規定される「登場人物」と、重なり合いながらも同一ではない。その他者は、読者と事象との関わりにあり、その関わるの瞬間は、文学作品の同一性に還元されないからである。ゆえに、文学作品における他者もまた、同一性に基づいた延長的な規定である「登場人物」に還元されない⁷。

また、文学作品における他者は、統一的な主体である作者や読者の投影でもない。確かに、

⁷ 『ドン・キホーテ』における「風車」は登場人物ではない。おそらく、その「風車」である「巨人」もまた、登場人物ではないであろう。しかし、その両者ともが、他者である可能性を持ち、同時に、自然物である可能性をも持っている。そうした可能性の必然化は、まさにそれらと作者や読者との関係においてなされるであろうが、その関係以前に一概に決まるわけではない。

文学作品における他者は、その領域で反復する事象との関係に、作者や読者が差異を見出す限りにおいて、現前する。しかし、作者や読者は、事象が作者や読者ではないからこそ、差異を見出すことができる。このことは、文学作品における他者が、作者や読者の写し身ではないことを示している。

文学作品とそこで反復する事象とを、注意深く区分することで、文学作品における他者は、登場人物や作者、読者といった既存の他者ではない、と否定的に規定される。しかし、文学作品における他者を理解するという課題においては、規定の否定性は重要ではない。むしろ、文学作品における他者が、既存の他者と重ね合わせられる時に、そうした否定的規定が生じるという点が重要である⁸。このことは、文学作品における他者が、その重ね合わせ以前に、独自にいるということを示している。

既存の他者を重ね合わせることは、文学作品における他者を、それがあつた事象から連れ出そうとする動的な作用である。しかし、その作用は、文学作品における他者による抵抗的逃亡を生み出す。以上に述べた諸々の否定的な規定は、その逃亡の結果である。けれども、文学作品における事象に何者もないのであれば、その作用が生じることもない。つまり、既存の他者の重ね合わせは、文学作品の他者があつたことを前提としている。ゆえに、作者や登場人物を文学作品に見出す読者は、すでに、自覚的にも、非自覚的にも、文学作品における他者と出会っているのである。

以上において、文学作品における他者を、既存の他者を重ね合わせることで、理解しようという試みは否定される。しかし、その否定は、文学作品における他者が、その試みを可能にしていることも明らかにした。こうした、否定による明確化は、文学作品における他者を記述する方法に関しても、有用である。すなわち、既存の他者への重ね合わせによって、文学作品における他者を記述しようとする方法が、なぜ、不適切であると言えるのかを見ていくことで、より適切な方法を導入することができる。実際のところ、筆者が投影と呼ぶこの方法は、重ね合わせられた他者の記述を行う上では、適切である。しかし、文学作品における他者の記述の方法としては、不適切である。この違いは、文学作品における他者について、特別な記述上の課題があることを示している。以下では、投影の方法について検討することで、文学作品における他者にまつわる、記述上の課題を明らかにすることを試みる。

（２）投影という記述方法とその問題

作者という具体的な他者の理解のために、その思想の表象である文学作品において現れる理念や概念を理解すること。また、そうした理念や概念を、思想史やその作者がいた社会的状況に結びつけて、作者の意図の水準で論じること。社会学のみならず、文学評論やエッセイにおいて、こうした目的意識は一般的である。そして、その目的においては、文学作品で反復する事象の意味は、作者の思想を基準として理解される。それは、文学作品における事象の意味が、作者との関係において生じた意味に固定されるということである。また、事象の意味が作者を基準に固定される以上、文学作品における他者も、作者が出会ったとする他者（もしくは、作者自身）以外の可能性を持つことはない。その結果、文学作品における他者は、作者の思想の投影として記述される。そして、作者という他者を理解するという

⁸ 「差異は、ひとがその差異を同一的なものに従属させ続けるかぎりでは、否定的なものを巻き込むことがない」（Deleuze 1968=2007: 12）。

目的においては、作者を軸にすえたそうした記述は不適切ではない。

しかし、作者にとっての意味は、文学作品における事象の全ての意味ではない。確かに、以上に述べた目的意識において、その限定はしばしば侵犯され、作者の絶対性へと繋がる傾向にある。それは、作者という他者を、文学作品を基に理解しようという試みが、文学作品の絶対的な客体性を前提とするからであろう。もしも、文学作品が絶対的な客体であれば、それは、主体である作者が作成したとおりに、あらゆる瞬間において事象を反復させるだろう。ゆえに、その場合、事象は単一の意味に、文学作品における他者は単一の形態に、必然的に限定されることになるだろう。けれども、前章で述べたように、事象の反復を現実化するという作用は、それ自体、文学作品という領域に属している。つまり、文学作品は、絶対的な客体ではない。よって、その前提の棄却からして、作者にとっての意味が、文学作品における事象の絶対的な意味になることはない。

以上のことは、文学作品における他者についても同様である。研究者や読者と作者との関係において、文学作品における他者を、ある様態に規定しようと試みることは可能である。しかし、その規定は、文学作品における他者がある瞬間において、その他者に向けられたものではない。ゆえに、その他者自身の規定にはなり得ない。文学作品における他者を含まない、研究者や読者、作者からなる外的関係にあるのは、すでに規定された固定的な形式と内実を持つある代替物（記号、図式、文章など）である。つまり、文学作品における他者は、その他者との関係の外部で、ある固定的な形式と内実をもって規定されることはない。

このように、文学作品における他者を、作者の投影や規定によって記述しようとする試みは、結局のところ、文学作品における他者を記述してはいない。これが、投影という記述方法が、文学作品における他者の記述には相応しくない理由である。そこで記述されているのは、投影された作者であり、規定することを可能にする外的な関係である。これは、作者だけではなく、読者についても当てはまる。すなわち、読者は、文学作品に関わるその瞬間で出会ったその他者を、自らの投影の結果として記述することが可能である。しかし、その記述は、文学作品における他者の記述ではなく、読者自身の記述になっている。

投影という記述方法は、文学作品における他者自身を、その者がある瞬間を超えて記述しようという試みに由来する。しかしながら、文学作品における他者は、その瞬間を、投影された、既存の他者や記号などの外的なものに基づいて、超え出ることができない。それは、その超出のために依拠したものが持っている持続性のうちに、消え去ってしまうからである。ここに、文学作品における他者の瞬間性が、記述上の課題であることが明らかになる。それは、文学作品における他者についての記述は、その他者に対して瞬間から超え出ることがを要請するが、その要請に従うとその他者を記述することができないという課題である。

文学作品における他者に、文学作品の統一性に基づいて規定される登場人物を、投影することで記述するという方針も、以上の課題に突き当たる。この方針においては、文学作品における他者を、文学作品における登場人物を表す文字（名前）に置き換えることで、その他者を、瞬間を超えて記述しようとする。そして、その登場人物とは何者であるのかを、作者や読者の介入を排除し、文学作品内に散りばめられた文字から導こうとする。

けれども、この方針にも、以上に述べた、投影という記述方法が持つ問題が潜んでいる。そして、その問題は重なり合う 2 つの否定的な問いを、この方針に対して提示する。1 つは、文学作品における他者は、その者がいる瞬間において、文学作品の登場人物と同一であるのかという問いである。もう 1 つは、同一形象の総体として構成される登場人物の記述は、読

者が瞬間において出会う，文学作品における他者の記述であるのかという問いである。

まず，文学作品における他者は，その者がいる瞬間において，文学作品の登場人物とイコールではない。このことは，注7において述べている例が，端的に示している。加えて，より根本的な，文学作品における他者と文字との関係においても説明される。文学作品における他者は，それが文学作品という領域にある以上，その領域を構成する要素である文字がない場合には，存在しない。しかし，その領域的な限定は，登場人物の名前という文字の区分が，文学作品における他者を定めていることを意味しない。文学作品における他者は，そのように区分される以前の文字において，すなわち，事象として，読者と出会うからである。

文字の区分と，それによる文学作品の登場人物の構成は，文学作品の持続や，読者の反省によって可能となる。その目的は，文学作品における他者を形象化することで，他の瞬間にある文学作品における他者との間に，同一的なつながりを構築することである。こうして，文字を基に構成される登場人物は，文学作品という単位で，瞬間をまたがる同一性を獲得する。この同一性は，登場人物が登場する瞬間を配置する基準となり，結果として，登場人物の歴史が構成される。それは，登場人物の始まりと終わりとは定まることを意味する。つまり，登場人物は，その登場人物を示す文字の配置に従った歴史性を持つ。

そうして構成された登場人物は，歴史性を持った者として，瞬間にとどまることはできない。ゆえに，登場人物が，文学作品における他者の記述に使用される場合には，各瞬間に，登場人物と同一の文学作品における他者を分配し，かつ，それらを統合するという二重のプロセスを伴わねばならない。その場合，文学作品における他者は，最終的に構成される登場人物が果たすべき，既に定まっている役割を示していることになる。けれども，そのプロセスにおいては，文学作品における他者は，もはや独自の存在ではない。つまり，たとえ，文学作品に依拠したとしても，投影という記述方法は，文学作品における他者の他者性を失わせるのである。

文学作品における他者は，それ自体の瞬間性を超え出て，他者として存在することはできない。その他者の他者性は，非規定的な瞬間のみにある。これは，文学作品における他者に，既存の他者，異なる形象を投影し，それらによって記述しようとする試みは，必ず自己矛盾に陥ることを意味している。ゆえに，投影という記述方法は，文学作品における他者についての記述方法としては，不適切となる。その方法は，対象としていた文学作品における他者を，その他者性を失わせることによってのみ記述可能とするからである。

（3）相互作用による瞬間の超越

以上の検討により，文学作品における他者の他者性は，その他者がいる瞬間の外部において描写可能な，具体的形態にはないことが明らかになる。たとえば，「目は大きくて，すばらしくうつくしく，やはりまっ黒です」（Ende 1973=2005: 14）という形象は，ある登場人物の形態を文学的に表している。けれども，読者が文学作品において出会う他者は，そうした形態であるがゆえに，他者であるわけではない。むしろ，読者が出会った他者が，偶然に，そのような形態をしていたのである。つまり，文学作品における他者の他者性は，形象に規定される形態にはない。その他者性は，読者との関係に，その所在を求める。

この，文学作品における他者の他者性に記述の焦点を合わせることで，記述の目的にも転換がもたらされる。それは，その他者が何であるのか，から，その他者がどのようにあるのか，への転換である。この転換は，記述上の関心の変容も伴っている。文学作品における他

者自身を対象とする記述は、文学作品における他者が持つ特性の一覧表を並べることに関心を寄せていた。しかし、文学作品における他者の他者性を対象とする記述は、その他者が、他の他者とのいかなる関係にあるのかに関心を向ける。そのため、この関心に基づいた記述は、文学作品における他者がある関係の結び目を、その対象とする。これは、文学作品における他者に出会う瞬間において、その文学作品における他者を取り巻く関係、相互作用を取り上げ記述する方法である。

文学作品における他者自身ではなく、その他者がある相互作用を記述することは、文学作品における他者の瞬間性を剥奪しない。それは、この記述方法が、その瞬間に対して、いかなる外的な規定も持ち込まないからである。文学作品における他者がある相互作用の記述は、その他者を、作者や形象の投影によって規定することを必要としない。そうした規定を、文学作品における他者に対する作用として、記述することはあっても、その記述は作用の記述にとどまる。すなわち、他者を規定内実には置き換えることはしない。文学作品における他者がある相互作用は、そうした規定がなくとも、成立しているからである。

一方で、相互作用の記述は、文学作品における他者の他者性を、他の瞬間に参照可能な形で示すことも可能とする。これは、ジンメルの言うところの「形式」が、相互に参照可能な基準となって、文学作品における他者のあり方を提示するからである。すなわち、文学作品における他者がある相互作用は、その形式によって、瞬間を超えて、他の瞬間の他の他者がある相互作用と結びつく可能性を持っている。このことは、相互作用に注目した、文学作品における他者の記述は、その他者と直接出会ったことのない人にも、理解可能となることを示している。

ここで重要なのは、文学作品における他者がある相互作用が、他の他者がある相互作用と形式を共有するかは、事前に定まっているわけではないという点にある。相互作用間の結びつきは、あくまで、記述によって現実化される可能性でしかない。確かに、文学作品における他者がある相互作用は、それが相互作用である以上、ある種の「形式」を含んでいる。しかし、その具体的な形式は、他の相互作用における「形式」と比較された結果としてあるわけではない。その「形式」は、相互作用に当然あるものとして、そのようにある。つまり、文学作品における他者がある相互作用の「形式」は、既存の相互作用の投影ではない。そもそも、読者と文学作品における他者との出会いにおいて、両者の間に相互作用は生じている。ゆえに、外的に相互作用を持ち込む必要もない。こうして、相互作用を対象とした文学作品における他者についての記述が、その他者の瞬間性を侵犯せずに、しかし、他者性を参照可能にすることが保証される。

この際、相互作用を対象とする文学作品における他者についての記述を、外的関係の投影による記述と区分するのが望ましいだろう。後者の記述は、その対象を見失っているからである。たとえば、ある作者が作成した文学作品における人物間の関係を、作者とその恋人との関係に紐付けて記述することは可能である。しかし、その記述は、以上の2つの関係間の繋がりを対象としているに過ぎない。つまり、文学作品における他者がある相互作用の記述ではない。このことは、文学作品における他者がある相互作用の記述が、時に、非常に物足りないことを含意している。しかし、文学作品における他者の記述は、その物足りない水準にとどまらなければならない。それは、これまで述べてきたように、文学作品における他者の瞬間性ゆえに、作者や読者、文学作品の形象を、容易に投影することができるからである。だからこそ、文学作品における他者を記述するという目的においては、その他者がある相互

作用そのものを、形式と内容が欠けたり足されたりすることなく、記述する必要がある。

文学作品における他者がある相互作用は、読者を筆頭に、様々な他者たちとの関係において生じている。特に、他の文学作品における他者との相互作用は、両者が「文学作品における」という但し書きを共有することから、記述が容易である。また、文学作品における他者と作者や読者との相互作用についての記述も、不可能ではない。それどころか、文学作品における他者がある相互作用の記述においては、重要な対象でもある。ただし、その際、「現実」世界が持つ文学世界に対する優位性や、既存の他者の統一性を前提とせず、文学作品における他者の他者性を剥奪しないように注意する必要がある。文学作品における他者が、超出不可能な瞬間の中にいるということ。そのことについての自覚が失われれば、たとえ、相互作用についての記述であっても、文学作品における他者は、その姿を消すことになる。

5. まとめ

本稿は、文学作品という領域において他者がある可能性と、その他者についての記述の可能な方法を提示した。以下に、その総括を示すことにする。

まず、文学作品という領域は、事象の反復が現実化するという実践に基づいた、技術的・集合的諸規則に、領域の統一性を持っている。そして、個々の文学作品は、領域の統一性に基づいた自らの持続に沿って、事象を唯一の瞬間に留めおかず、他の瞬間へと連れ出す。必然的に、事象は、瞬間から瞬間への反復をすることになる。

文学作品と事象との以上の関わりは、意味という次元において、事象と文学作品という領域とが、それぞれの固有性を獲得することを裏付けている。文学作品において反復する事象の意味は、各瞬間において、他者が持ち込んだ差異によって生起する。それぞれの瞬間における事象の意味は、その瞬間に持ち込まれた差異によって質的に区別される。すなわち、事象の意味は、他者との関係にある、瞬間的なものである。

一方で、文学作品という領域の意味は、文学作品という領域と事象との関わりにおいて、生起する。その関わりにおいて、文学作品という領域は、事象が瞬間において読者と向かい合うことを可能にするために、事象を他の瞬間へと反復する。すなわち、文学作品という領域の意味は、事象が他者と関係を取り結ぶことを保証することにある。そして、個々の文学作品は、事象に対する以上の関わりを現実化するあり方に、固有の意味を持つ。そして、その固有性を通じて、読者は事象に向かい合う。ゆえに、個々の文学作品の意味は、読者が事象に向かい合う瞬間において、生起する。

個々の文学作品と反復する事象とは、読者に向かい合う瞬間に、固有の意味を持つ。このことは、文学作品という領域において、読者が、なにものにも還元されない事象に向かい合うことが、可能であることを意味している。読者が向かい合う事象は、固有の文学作品によって現実化されたその瞬間に、読者との関係において、意味を生起する。ゆえに、読者が、事象との差異を、その関係に持ち込む限り、事象の意味は、他のいかなる関係にも還元されることはない。その場合、文学作品における事象は、読者との差異を持つ者として、読者と出会うことになる。よって、文学作品という領域には、他者がありうることが示される。

以上の結論を踏まえ、本稿の探究は、文学作品における他者についての記述へと移る。しかし、外的な他者を文学作品における他者に重ね合わせる、投影という記述方法の精査によって、文学作品における他者についての、記述上の課題が提示される。それは、文学作品に

における他者が、それがあゝ瞬間の外部には、他者として存在しえないことである。

この課題は、文学作品における他者についての記述対象を、他者自身ではなく、他者があゝ相互作用にすることで解決される。文学作品における他者は、他者である以上、何かしらあゝ相互作用の中にあるため、記述が不可能なことはない。加えて、相互作用の記述は、文学作品の他者を、それがあゝ瞬間から連れ出すことなしに、「形式」という基準において、参照可能にすることができる。よって、相互作用を対象とした記述が、文学作品における他者を記述する方法として可能であることが示された。

本稿で行なってきた探究は、文学作品という領域を例に、瞬間的な他者を理解・記述する可能性を示した。瞬間的な他者の可能性は、他者を持続的な「人間」に置き換えることに対して、ささやかな異議を申し立てる。この異議申し立ては、社会学における他者概念の問い直しの実践である、と同時に、要求でもある。つまり、本稿で示された瞬間的な他者の可能性は、他者とはいかなる者かという問いに立ち返ることを、社会学に求めるのである。

そして、相互作用を対象とする実際の記述は、各々の読者があゝ、文学作品における他者を、その形態を固定することなしに、日常生活世界の他者へと提示することを可能にする。この際、相互作用を対象とする記述は、外的な規定を、読者のあゝの瞬間に持ち込まないことが重要である。それにより、いかなる形態の文学作品における他者であつても、記述することが可能となるからである。そして、その普遍的な記述可能性は、文学作品という領域における、他者とのあゝという読者の経験を、その記述方法が否定しないことを意味している。つまり、相互作用を対象とする記述方法は、文学作品における他者とのあゝの自明性を剥奪することなく、そのあゝが持つ読者にとっての意味を明らかにする。このようにして理解される意味は、文学作品という領域が生活の一部を占める現代においては特に、社会学が目的とする他者理解の一助となることだろう。

参考文献

- Benjamin, Walter, 1921-2, "Goethes Wahlverwandschaften." (久保哲司訳, 1995, 「ゲーテの『親和力』」 浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション1——近代の意味』筑摩書房, 39-186.)
- Deleuze, Gilles, 1968, *Différence et Répétition*, Paris: P.U.F. (財津理訳, 2007, 『差異と反復 上』河出書房新社.)
- Ende, Michael, 1973, *Momo*, Stuttgart/Wien: Thienemann Verlag. (大島かおり訳, 2005, 『モモ』岩波書店.)
- Foucault, Michel, 1969, *L'Archéologie du savoir*, Paris: Gallimard. (慎改康之訳, 2012, 『知の考古学』河出書房新社.)
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford: Oxford University Press. (伊藤嘉高訳, 2019, 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.)
- 大塚英志, 2020, 『文学国語入門』星海社.
- Schütz, Alfred and Thomas Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (那須壽監訳, 2015, 『生活世界の構造』筑摩書房.)
- Simmel, Georg, 1900, "Kein Dichter." (鈴木直訳, 1999, 「いかなる意味でも文学者ではなく」 北川東子編『ジンメル・コレクション』筑摩書房, 65-70.)
- , 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Berlin: Duncker & Humblot. (居安正訳, [1994] 2016, 『社会学——社会化の諸形式についての研究 上』, 白水社.)